

## あとがき

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員 武内 佳代  
お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員 三村 恭子

ここまで、ジェンダー研究を視座として実践編・理論編の二段構成で、微視的／巨視的、あるいは共時的／通時的といった多角的な視野から、妊娠・出産を含めたものとしての「育児」という問題系を取り上げてきた。それらすべての報告によって、若手研究者と育児ワーキンググループ（以下、WG）のあゆみや理念、これまでの活動成果や今後の展望をあますところなく語り尽くしてしまった今、ここであえて述べておきたいことは、ごくわずかしかない。

ゆるやかな（妊娠）期間を経て、ようやく 2007 年秋、F-GENS の若手研究者ジェンダー・スタディーズ・ネットワーク（JSGS-Net）から産まれたばかりの本 WG は、メンバーによって、この冊子発行にいたるまで、文字通り初めての〈育児〉のように「手のかかる」「手探り」の模索を続けられてきた。育児者や育児未経験者からなる WG のメンバーが「育児」について議論すればするほど、育児者とそうでない者との分断があからさまに浮かび上がってきて、WG の活動方針や活動内容など、話がなかなかまとまらなかったことも数知れない。だが、そうした「手のかかる」「手探り」の対話こそ、育児者とそうでない者との亀裂を修復し、互いに理解や共感を深める近道であったことは、短い期間にも関わらずこうして充実した成果報告をまとめられたこと、それ自体が証明してくれよう。

冊子発行まで、ともに遠い近道を辿ってくださった WG メンバーや執筆者の方々、また、そうした「手のかかる」前進をご賛助くださった郷通子学長、富永典子先生、そして、おしめないご支援くださった F-GENS 事業推進担当者の戒能民江先生、菅聡子先生、JSGS-Net の松尾江津子さん（COE 研究員）、F-GENS 事務局の蝶谷綾子さん、吉原公美さんには、改めて深謝の意をしりたい。

さらに、私たちを支え続けてくれた二人の超若手メンバーにも感謝の言葉を送りたい。「ロンブンがんばって！」とエールを送りつづけてくれた三村史、そして、ときにテーブルをかじり、ときにハトのようにパンをついばみながら、私たちの会議に幾度となく参加し、多くのインスピレーションを与えてくれた三村灯は、私たちの活動にすてきな彩りを与えてくれた。どうもありがとう。

そして何より、本冊子をここまでお読みくださった皆さまに心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。